

第二十二回 新城薪能

とき 平成二十三年八月二十日(土)
午後四時三十分始
ところ 新城文化会館大ホール

能 組

仕舞

芦 狸 玉 昭 玉
刈 々 葛 君 葛
川 村 美 幸
杉 野 莉 子
加 藤 晃
村 田 昂 平
今 泉 尚 美

連 調 天 鼓

佐藤 栗谷 明生

中西深雪 伊藤秀枝 小林寿枝 小野弘子 星岡ア子 今岡ア子 永田聡子

小舞

津の国 加藤久和 石河藤五郎 酒井淑規 街道下り 大原正巳

仕舞

西王母 榎本奈月 吳服 榎本美月 卷絹 鳥居久仁子 藤戸 本田洋子 三井寺 岩崎葉子

狂言 二人袴

親 聲

山本 勝 酒井 宏

男 太郎冠者

水谷至男 小沢貞博

後見 山口俊一

休 憩

午後4時50分頃

午後6時20分頃

火入式

新城市議会議長
新城市教育委員長

荒川修吉
川口保子

あいさつ

新城市市長

穂積亮次

仕舞

西王母 中西深雪
草紙洗小町 伊藤秀子
雲雀山 太田温子
山姥 小林寿枝

狂言 素袍落

太郎冠者 天野雅夫

主人 清川松佐
伯父 大原正巳

後見 加藤賢一

午後6時45分頃

能 船弁慶

子方 長田悠那
後シテ 中嶋康夫
前シテ 杉浦史佳

ワキ 長田共永
ワキツレ 渡辺敏康

大鼓 清水利高
小鼓 森田收
大鼓 鈴木崇史
笛 今泉英三

間 佐野泰三

後見 粟田康弘

地謡 櫻本泰朗
太田研司
竹内省吾

粟谷浩之
中村邦生
粟谷能夫
佐藤陽

附祝言

(終了予定 午後八時三十分頃)

主催 新城市

新城市教育委員会

主管 新城市文化事業運営委員会

新城薪能実行委員会

後援 新城市観光協会

あらすじ

狂言 二人袴

賀入りのため、舅の家に行くことになった花賀が、一人では恥ずかしいというので、父親が門前までついていく。袴を持たない賀は父親のを借り、舅と初対面の挨拶をして、盃事になる。門前に父親がいることを知った舅は、ぜひとも親も顔を出すようにと促すので、賀が迎えに行く。しかし袴はひとつしかない。交互にはきかえて出て何とか急場をしのぐが、そのうち一緒にでるように求められる。窮した二人は袴を前後に裂き、それぞれ前にあてて出るが・・・

狂言 素袍落

伊勢参宮を思い立った主人は、かねて同行を約束していた伯父のところへ太郎冠者を使いにやる。誘いを断った伯父は太郎冠者が供をすると聞いて門出の祝い酒を振舞う。酔いが回った太郎冠者。伯父をほめて主人をけなしたあげく、餞別の素袍をもらって上機嫌で帰路につく。帰りが遅いと迎えに来た主人に、落とした素袍を拾われて・・・

能 船弁慶

平家追討に功績をあげた源義経でしたが、頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。義経は、弁慶や従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ到着します。義経の愛妾、静御前も一行に伴って同道していましたが、女の身で困難な道のりをこれ以上進むことは難しく、弁慶の進言もあり、都に戻るようになりました。別の宴で、静は舞を舞い、義経の未来を祈り、再会を願いながら、涙にくれて義経を見送ります。

静との別れを惜しみ、出発をためらう義経に、弁慶は強引に船出を命じます。すると、海上に出るや否や、突然暴風に見舞われ、波の上に、壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現しました。なかでも総大将であった平知盛の怨霊は、是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかります。弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷します。その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、白波ばかりが残りました。

新城と能楽

新城の能楽は新城の歴史とともに始まりました。長篠・設楽原の戦いの後、長篠城の城主であった奥平信昌は、徳川家康の娘亀姫と結ばれ、新しいお城を郷ヶ原に築きます。これが新城という地名の始まりです。そして、天正四年（一五七六）、その落成祝いに観世与三郎を招き、城中二の丸で祝い能を催したのが始まりです。

その後、元文元年（一七三六）、領主管沼定用の家督相続を祝い、富永神社で能を奉納しました。これが例となり、祭礼のときに地区の氏子が社前で祭礼能（市指定文化財）を奉納するようになりました。富永神社には文政九年（一八二六）に再建された能舞台（市指定文化財）があります。この境内で町衆によって二七〇年余り、祭礼能として続けられています。

薪能

この名称は、夜になって薪を炊いて、それを照明代わりに演能するところから来た名称ではありません。もとは「薪の神事」などと称して、新年に薪を寺社に献進する儀式で、一種の春迎えの信仰行事でした。

新城においては新城文化会館が完成したことを契機に、平成二年第一回「新城薪能」が新城市文化協会によって催され、大好評を得ました。新城薪能は富永神社で行われる祭礼能とは別に、流派を問わず誰でも参加できる、まさに「能楽の里」を目指しており、その想いは今も生き続けています。現在、日本全国で二百か所ほど薪能が催されていますが、新城薪能のように、シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方の全てが素人というのはほとんど例を見ないといわれています。このような新城薪能を、永い伝統を持つ富永神社祭礼能とともに、維持発展させていくことが私たちの願いです。